

広島県立歴史博物館

研究紀要

第26号



- 資料紹介 「栗山堂銭筵詩画卷」(重要文化財「菅茶山関係資料」)の
翻刻及び訳注について…………… 吾 田 朱 里 1
 - 研究ノート 広島頼家伝来の細川家犬追物と上覧相撲の図について…… 川 邊 あさひ 27
 - 二つの「今中大学日記」の比較による両日記の性格と特色…………… 久 下 実 37
 - 「縮景園図巻」について—十八世紀末の縮景園に係る歴史資料—…………… 白 井 比佐雄 47
 - 「縮景園記稿本」について—新発見の頼春水著「縮景園記」草稿—…………… 白 井 比佐雄 85
 - 「山陽先生詩稿」訳注(三)…………… 花 本 哲 志 116
-
- クサイツ・草出・草土—草戸千軒の呼称について—…………… 下津間 康 夫 (1)

BULLETIN
of
the Hiroshima Prefectural Museum of History

Vol.26

2024

Names of Kusado Sengen-cho Site on Historical DocumentsSHIMOZUMA Yasuo (1)

Materials introduction : Re-engrave and translation note of the handscroll

“Ritsuzandousenenshigakan”AZUTA Akari 1

A study on the illustrations of the Hosokawa clan’s Inuoumono and Sumo was

performed in front of the Shogun, inherited by the Hiroshima-Rai clanKAWABE Asahi 27

Charactaristic of Two “IMANAKA-Daigaku-nikki” (IMANAKA Daigaku’s Diary)

through comparison KUGE Minoru 37

Consideration on “Shukkeien-zukan” (Shukkeien-garden illustrated handscroll)

—Historical materials related to Shukkeien at the end of the 18 century— SHIRAI Hisao 47

Consideration on “Shukkeien-ki kouhon” (manuscript of “Shukkeien-ki”)

—Newly discovered draft of Rai Syunsui’s “Shukkeien-ki” — SHIRAI Hisao 85

Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part3 HANAMOTO Satoshi 116

御挨拶

広島県立歴史博物館は、中世の港町・市場町である草戸千軒町（鎌倉時代から室町時代にかけて繁栄した町）の遺跡、近世後期の備後国神辺（現在の福山市神辺町）出身の漢詩人・儒学者・教育者である菅茶山の関係資料、日本屈指の古地図資料を集めた守屋壽コレクションを中心に、広島県の歴史と文化を発信する拠点として、また、生涯学習の推進施設として、地域文化の向上に努めているところです。この研究紀要は、調査研究の成果を広く公開し、活用することを目的に刊行しています。

さて、今回の研究紀要には、重要文化財菅茶山関係資料の中から「栗山堂餞筵詩画卷」の翻刻と訳注、広島頼家に伝わる細川家の犬追物と上覧相撲の図について資料の年代を検討し頼家に伝来した経緯に関する考察、二篇の「今中大学日記」を比較することで明らかとなった特色と両者の関係性、十八世紀末の縮景園の景観を描いた『縮景園図巻』に記録された縮景園の改修内容の検証結果、縮景園の景観を描写した『縮景園記』の草稿である『縮景園記稿本』に関する資料紹介、広島頼家関係資料の中から頼山陽の漢詩草稿の訳注の取組、草戸千軒の呼称に関する一考察の七編の論考を収録しました。

あらためて、当館の調査研究活動に御支援・御協力を頂いた多くの方々に感謝の意を表し、本書が今後とも広く活用されることを念願して、発刊の御挨拶とします。

令和六年十二月

資料紹介 「栗山堂餞筵詩画卷」(重要文化財「菅茶山関係資料」)の

翻刻及び訳注について

吾田 朱里

1 はじめに

平成二十六年(二〇一四)に指定された重要文化財「菅茶山関係資料」は、江戸時代後期の儒学者であり漢詩人でもある菅茶山(一七四八～一八二七)の生存期に作成及び収集された資料群で、江戸時代後期の文人の交流や文化の展開、地方における文化の発展を今に伝えている。資料総数は五、三六九点にのぼる。

その資料群の中から本稿で紹介する「栗山堂餞筵詩画卷」(以下「詩画卷」という。)は、文化元年(一八〇四)に藩命によって江戸に赴いた茶山が、帰郷を前に柴野栗山邸を借りて主催した留別の宴に関する資料である。

江戸へ出立した文化元年一月二十一日以降から文化二年六月五日までの日記は、今日では失われており、その時期に茶山が詠んだ漢詩や茶山に関わった人物が記述した資料が残るのみである。よって、江戸での茶山の交流について知り得ることができる重要な資料の一つとなっている。

本稿はこの資料について翻刻し、訳注を紹介することを目的とする。

翻刻〔〕及び訓読の漢字は、原則として通用の字体を用いているが、一部正字体を残したところもある。訓読の送り仮名は歴史的仮名遣いとし、読み仮名は現代仮名遣いとした。また、詩については便宜上、句ごとに行

替えを行い、換韻(通韻を含む)の箇所には、「印を付した。

2 資料及び栗山堂における餞筵の概要について

本資料は、絹本著色及び墨書の卷子装で、縦二六・八センチメートル、横八八・〇センチメートルで、絹に継ぎの形跡は無い。前述したように、茶山が江戸から神辺に帰郷する前の文化元年(一八〇四)七月十八日に茶山自ら主催した、栗山邸の「対岳楼」での宴に参加した者による、茶山への送別の絵画又は詩である(茶山と名前不詳の者を除く)。

「詩画卷」の中で唯一、対岳楼の宴について描いていない絵がある。それは参加者の一人である鈴木芙蓉が描いた絵で、「蘇遊図」と名付けられているように、蘇軾の「後赤壁賦」に関連する絵である。このことについては、次の章の「蘇遊図」柴野栗山賛の項で詳しく述べる。

参加者は、『黄葉夕陽村舎詩』後編卷之三の「谷文晁富山対写図」の脚注に記されている⁽²⁾。それに拠ると、茶山を含め、谷文晁、鈴木芙蓉、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲、岩瀬華沼、頼杏坪、倉成龍渚、岡田寒泉と名前不詳の胡琴を良くする者の総勢十一名である。

宴の参加者と「詩画卷」の中の谷文晁筆「対岳楼宴集当日真景図」(以下

「真景図」という。写真1参照。）に描かれた人物の比定及び特徴については、藤原幹大氏と中村真菜美氏による令和四年（二〇二二）の研究発表で、文献資料と絵画資料を合わせ、詳しく考証されている⁽³⁾。

藤原・中村両氏の研究発表によると、栗山邸の訪問者録「雙玉樓帖」の写本である「柴栗山先生雙玉樓帖書尾記文」（鎌田共済会郷土博物館蔵）には、前述の詩「谷文晁富山対写真」の脚注に記載されている十一名の他、栗山の養子である柴野碧海が、宴に同席していたことが記されている⁽⁴⁾。「真景図」には碧海は描かれておらず、「詩画卷」にも碧海の漢詩は掲載されていないため、時を経て茶山の記憶違いが起きていると考えられる⁽⁵⁾。

「真景図」内に描かれた人物について藤原・中村両氏は、前述の研究発表内で極致庵主人篇『凡品雑録』（日本医事通報社 一九一九年）に掲載されている「真景図」の下絵のような絵⁽⁶⁾（以下、写真2という。）と、高松の医者であった久保桑閑（一七一〇～八二二）の子孫に伝わる一幅の絵⁽⁷⁾（以下、写真3という。）をもとに比定している。

極致庵主人とは、東京慈恵会医科大学初代学長の金杉英五郎（一八六五～一九四二）のことで、この写真2は文晁の門人である船津文淵（一八〇六～五六）の遺族から購入したと『凡品雑録』に記されている⁽⁸⁾。

写真2には中国の文人のような恰好をした人物の付近に、宴の参加者の名前が書き添えられている。ただし、岩瀬華沼の名前だけが記入されていない。

しかし、「詩画卷」記載の詩、前述した茶山の詩の脚注及び「柴栗山先生雙玉樓帖書尾記文」に記載された参加者を見ても、華沼は宴に参加しており、写真2の丸で囲った名前の付されていない人物であると推定される。

また、『凡品雑録』には茶山が持っている「真景図」とは別に、もう一つ栗山に贈られたものと記載されている⁽⁹⁾。それは前述した久保桑閑の子孫に伝わる写真3であると考えられる。

久保桑閑は、名を方穀、号は初め得水、後に桑閑と称した。生涯を在野の医師として過ごした。桑閑と栗山は親交があり、桑閑や栗山が亡くなった後も柴野家と久保家の親交は続いていた⁽¹⁰⁾。その関係で久保家のもとに「真景図」が渡ったと考えられる。

写真3にも宴の参加者の名前が書き添えられているが、写真2との相違が以下の三点ある。

- ① 写真2では頼杏坪とされる人物が、写真3では杏坪の長兄の頼春水になっている。
- ② 写真2では無かった岩瀬華沼の名前について、写真3では記載がある。

- ③ 写真2には倉成龍渚の名が書き添えられている人物について、写真3では名前の記載がない。

以上の相違があるものの、両幅の絵の記載に拠って「真景図」に描かれた人物を比定することが可能である。よって、胡琴演奏者以外の人物について、両幅の記載を基に比定しつつ、略歴について紹介する。

宴を主催した菅茶山は、名は晋帥、字は礼卿、通称は太中、号は茶山と称した。備後国神辺で郷塾「廉塾」を経営しつつ、福山藩儒として福山藩の藩校「弘道館」の教授も務めた。「真景図」内では、「A卓」の向かって右側に座り、胸の前で腕を組んでいる人物が茶山である。

谷文晁（一七六三～一八四〇）は、名を正安、通称は文五郎、字及び号は

文晁、また別に写山楼、画学斎と号した。父は田安家の家臣、谷麓谷である。はじめ、狩野派の加藤文麗に学び、後に長崎派の渡辺玄対に師事する。天明八年（一七八八）に田安家に出仕後、寛政四年（一七九二）以降、元老中で白河藩主の松平定信編纂の『集古十種』の挿図を描いた。「真景図」内では、富士山の近くの「B卓」で絵を描いている人物が文晁である。

鈴木芙蓉（一七四九～一八一六）は、名を雍、字は文熙、通称は新兵衛、号を芙蓉、木芙蓉、老蓮と称した。信濃国飯田に生まれ、江戸に出て渡辺湊水に学んだ。林家に入門し儒学を学び、柴野栗山の推挙によって、徳島藩の御用絵師となった。「真景図」内では、「D卓」で絵を描いているふくよかな人物が芙蓉である。

宴の場を提供した柴野栗山（一七三六～一八〇七）は、名を邦彦、通称は万吉、平助、字は彦輔、号を栗山、古愚軒と称した。讃岐国三木郡牟礼村に生まれ、高松の後藤芝山に学び、宝暦三年（一七五三）江戸に出て林家の門人となり、昌平黌で学んだ。明和二年（一七六五）、京都に移り、高橋図南に師事し国学を学んだ。明和四年（一七六七）、徳島藩に儒官として仕え、天明七年（一七八七）からは幕府の儒官となった。岡田寒泉、尾藤二洲、古賀精里らと共に寛政の三博士と呼ばれており、幕府の学問所「昌平黌」で学制の改革に努め、老中松平定信に勧めて寛政異学の禁を発足して朱子学を振興した。「真景図」内では、「C卓」で筆を持って揮毫しようとしている人物が栗山である。

古賀精里（一七五〇～一八一七）は、名を樸、通称は弥助、字は淳風、号は精里である。肥前国佐賀郡古賀村に生まれ、京都に遊学して福井小車や西依成斎に陽明学を学び、大阪で尾藤二洲や頼春水らと親交して朱子

学を修めた。帰郷後は藩校「弘道館」の創設に努め、その教授となり、朱子学の振興に努めた。寛政三年（一七九二）、幕命により昌平黌で経学を講義した。寛政八年（一七九六）、幕府の儒官となった。「真景図」内では、「A卓」の向かって左側に座り、盃を持っているどっしりとした大柄な人物が精里である。

尾藤二洲（一七四七～一八一三）は、名を孝肇、通称は良佐、字は志尹、号は二洲、約山である。伊予国川之江の廻船業者の家に生まれ、幼少期に右足を負傷して、歩行が不自由となる。はじめ、宇田川楊軒に古文辞学を学び、明和七年（一七七〇）に大阪に出て片山北海に学び、懷徳堂の中井履軒や頼春水らと交わり、朱子学へ転向した。寛政三年（一七九二）に、昌平黌の教授となり、朱子学の振興に努めた。「真景図」内では、「A卓」の向かって左側付近の小姓に身を預けて立っている人物が二洲である。

岩瀬華沼（一七三二～一八一〇）は、名を行言、通称は勘平、字は子言、号は華沼である。河口静斎に師事して儒学を学び、島原藩儒となり、寛政五年（一七九三）に創設された藩校「稽古館」の教授となった。「真景図」内では、「A卓」の手前に座り、盃を掲げた細身の人物が華沼である。

頼杏坪（一七五六～一八三四）は、名を惟柔、通称は万四郎、字は千祺、季立、号は杏坪、春草である。安芸国竹原の紺屋に生まれ、茶山とは長兄の春水、次兄の春風、甥の山陽と共に、家族ぐるみの親交があった。安永九年（一七八〇）に春水のいる大阪へ遊学し、天明三年（一七八三）に春水に従い江戸へ行き、服部栗斎に朱子学を学ぶ。天明五年（一七八五）に広島藩儒となり、世子の浅野齊賢の侍読を務めた。文化八年（一八一二）に御納所奉行上席城郡役所詰となり、その後文化十年（一八一三）に三次郡

奉行を務め、『芸藩通志』を編纂した。「真景図」内では、「C卓」の向かって右側に座している人物が杏坪である。写真3では、「春水」と書き添えられているが、「詩画卷」内の落款が杏坪であることから、春水ではなく杏坪である。

倉成龍渚（一七四八～一八一三）は、名を莖、通称は善司、字は善卿、号は龍渚である。中津藩儒者で、中津藩校「進脩館」の教授を務めた。「真景図」内では、左端で富士山を眺めている人物が龍渚である。

岡田寒泉（一七四〇～一八一六）は、名を善里、のち恕とする。字は中卿また子強と称した。通称は清助、号は寒泉又は泰斎である。詩文を井上金峨に学び、村主玉水から朱子学を学んだ。寛政元年（一七八九）に幕府に儒者として登用された。翌年、柴野栗山とともに聖堂取締に任命され、寛政の異学の禁に尽力した。寛政六年（一七九四）には代官に転じて、常陸国内を統治しながら昌平黌の講師も務めた。「真景図」内では、「A卓」の中央に座り、紙のようなものを持ち、両手を挙げている人物が寒泉である。

「詩画卷」に記載の順番は、谷文晁と鈴木芙蓉の絵の後、柴野栗山、古賀精里、尾藤二洲、岩瀬華沼の五言古詩と続き、頼杏坪と倉成龍渚で七言古詩となり、岡田寒泉の五言絶句で詩が終わる。その後、この宴席で描いた絵が文晁、芙蓉の順に継ぎ足されている（写真10・11参照）。この継ぎ足された二幅の絵だけが絹ではなく紙に描かれているうえ、落款に対岳楼の宴で描いたと書かれているため¹¹⁾、記念として貼り足されたものと思われる。

次の章で、「詩画卷」に記載された順に詩の翻刻及び訳注を紹介する。

3 「栗山堂餞筵詩画卷」翻刻及び訳注

（1）鈴木芙蓉「蘇遊図」柴野栗山賛（七言絶句）（写真4）

（印）

令老蓮就谷生図添数筆／老蓮 老蓮をして谷生の図に就けて、数筆を

錯会而別作此図云後赤壁初段 添わしむ。老蓮、会を錯^{たが}ひて、別に此図を

也／事免不倫不宜割去也／余 作りて云ふに、「後赤壁初段なり」と。事、

家例以十月望夕宴／客以 倫ならざるを免じ、宜しく割去すべから

継蘇遊近在数日間／而 ざるなり。余家、例として十月の望を以

礼卿不肯待 て夕宴す。客、蘇遊を継ぐを以て数日間

以十三日発／ 近在す。而れども礼卿、待つを肯ぜずし

此因題比以 て、十三日を以て発す。

言恕 此に因りて題し、比^なべて以て怨を言ふ。

後遊未了子瞻帰 後遊未だ了^{おわ}らずして 子瞻^{しぜん}帰る

行到誰家鱸膾肥 行きて到る 誰が家 鱸膾^{ろかい}の肥あらん

記所相思半夜涕 相思ふ所を記して 半夜涕^{なみだ}す

滴和月露落征衣 滴^{した}りて月露に和し 征衣に落つ

柴彦題（印）（印）

【語釈】

「老蓮」鈴木芙蓉の号。「錯」食い違う。違える。「後赤壁初段也」北宋の文人、蘇軾

¹²⁾（二〇三六―一一〇一）が詠んだ「後赤壁賦」の初段のこと。元豊五年（一〇八二）

七月十六日の夜に左遷先の黄州府城の西北の漢川門外にある赤壁で舟遊し、「赤壁賦」を詠む。その三ヶ月後の十月十五日、再び赤壁に遊び、「後赤壁賦」を詠む。その初段「是歳十月望……」から次段の一節「於是携酒与魚、復遊於赤壁之下。（是に於ひて酒と魚を携へ、復た赤壁の下に遊ぶ。）」の箇所¹³と思われる。「不倫」、ふさわしくない、相当しないの意。「例」習わし。「蘇遊」前述の「後赤壁賦」にある十月十五日の赤壁での遊宴のこと。「子瞻」前述の蘇軾の字。茶山を蘇軾になぞらえている。「鱸膾」スズキのなます。東晋の呉の人、張翰が故郷の食べ物を懐かしみ、官吏を辞めて帰郷した故事¹⁴から、故郷を慕う気持ちのたとえ。「月露」月夜に輝く露。「征衣」旅衣。

◎韻字 帰・肥・衣（上平声五微）

【意訳】

谷文晁の絵に対して、鈴木芙蓉に数筆書き添えさせた。

芙蓉は宴を間違えて、七月の餞宴とは別のこの絵を描き、「後赤壁の初段の絵です」と言った。この詩画卷には合わないが、容認してこの絵を取り除かないほうが良い。

なぜなら私の家では、習わしとして十月十五日に夕宴をしている。客人は蘇軾の遊宴を受け継ぐために、数日間近辺に滞在する。しかし、茶山はそれを待たず、十月十三日に江戸を出立する。

よってここに詩を題し、残念な気持ちを書き添える。

後赤壁の遊宴が今だ終わらないまま、蘇軾たる茶山が帰郷する。張翰がスズキのなますを食べ、故郷の味を思い出して帰郷したように、いつ

たい誰の家で帰郷の思いを沸き起こさせる料理を食べたのだろう。

ここに書き添えながら、あなた（茶山）のことを思い、夜中に涙を流す。その雫は滴って月夜に輝く夜露とともに落ち、あなたの旅衣を濡らす。

【補訳】

この「詩画卷」は芙蓉の「蘇遊図」以外は全て、七月の対岳樓の宴について書かれている。栗山としてはこの七月の宴のことを描いて欲しかったが、「蘇遊図」を切り取るには忍びなく、芙蓉に文晁の絵に落款を書かせることで、芙蓉も対岳樓の宴を描いたことにしたと思われる。また、栗山が「蘇遊図」にこの賛を書き、茶山が十月十五日の夕宴に参加しないことを悔やむ詩を詠むことで、この「詩画卷」に「蘇遊図」を残した理由を説明している。

なお、「老蓮錯会……不宜割去也」の箇所については、いくつかの解釈がある¹⁵。

（2） 柴野栗山 五言古詩（写真5）

（印）

礼卿将還就我对岳樓 礼卿、将に還らんとするに、我が対岳樓

宴諸君／余因勸作図谷生／に就きて、諸君と宴す。余、因りて谷生に図

文晁喜而成之／人物極肖 を作ることを勧む。文晁、喜びて之を成す。

人物、極めて肖^にたり。

関西楊伯起 関西の楊^{よう}伯起

不落第二流 第二流に落ちず

一臥黄葉村 一たび黄葉村に臥し
 千喚不回頭 千たび喚べども頭を回らさず
 朝暮三時酒 朝暮 三時の酒
 清歌転妙喉 清歌 妙喉を転がす
 忽入有力耳 忽ち有力の耳に入り
 駆迫向東州 駆迫して 東州に向ふ
 可憫疲世途 憫むべし 世途に疲れ
 儼然似楚囚 儼然として楚囚に似たるを
 惟有芙蓉峰 惟だ芙蓉峰有りて
 可以解羈愁 以て羈愁を解くべきのみ
 晴日携酒餞 晴日 酒餞を携へ
 来借对岳楼 来たりて借る 对岳楼
 楼後秋山海 楼後 秋の山海
 举供君醉眸 挙りて君の酔眸に供す
 同人同臭味 同人 臭味を同じくし
 相迫来相求 相ひ追ひ 来りて相ひ求む
 雑坐無賓主 雑坐して 賓主無く
 交錯紛猷酬 交錯して 猷酬紛たり
 清癯或如鶴 清癯 或ひは鶴の如く
 鬚秃或如猴 鬚秃 或ひは猴の如し
 或如一足夔 或ひは一足の夔の如く
 或如千斤牛 或ひは千斤の牛の如し
 雖豎亦善舞 豎すると雖も亦た善く舞い

雖汗馱未休 汗すると雖も馱して未だ休まず
 或如振々鷺 或ひは振々たる鷺の如く
 或如泛々鷗 或ひは泛々たる鷗の如し
 灌澆或互嘲 灌澆し 或ひは互ひに嘲り
 争弁或相讐 争弁し 或ひは相ひ讐ゆ
 或談性命微 或ひは性命の微を談じ
 或陳王霸猷 或ひは王霸の猷を陳ぶ
 或大息世事 或ひは世事に大息し
 或長喟古謳 或ひは古謳を長喟す
 雖如異趣向 趣向を異にするが如しと雖も
 同是金蘭遊 同に是れ金蘭の遊
 雖如阮劉誕 阮劉の誕の如しと雖も
 同是董賈儔 同に是れ董賈の儔
 若使之当路 若し当路に之らしむれば
 或得藉箸籌 或ひは箸を藉りて籌を得ん
 可惜置事外 惜しむべし 事外に置きて
 視之如贅瘤 之を視ること贅瘤の如きを
 縦令使贅瘤 縦令ひ贅瘤たらしむるも
 世可更有否 世に更に有るべきや否や
 何不一作図 何ぞ一たび図を作り
 持帰照林邱 持して帰り 林邱に照らさる
 索居森寂夕 索居 森寂たる夕に
 可以破離憂 以て離憂を破るべし

柴邦彦拝贈(印)(印)

【語釈】

〔関西の楊伯起〕後漢の楊震のこと。名は震、字は伯起。函谷関の西にある弘農郡に住んでいた。儒学の經典に明るく博学だったため、「関西の孔子」と呼ばれていた。長い間、仕官せず民間で儒学を教えていたが、五十歳にして、漸く仕官した⁽¹⁶⁾。茶山を楊震になぞらえている。〔臥〕仕官せずに隠居する。〔千喚〕何度も呼び寄せる。〔回頭〕頭をめぐらせること。振り向くこと。〔三時〕朝・日中・黄昏のこと。ここでは、一日中。『栗山堂詩集』の「菅礼卿借余楼以宴諸賢得幽字」(以下『栗山堂詩集』という)では、「三槐」とする⁽¹⁷⁾。〔妙喉〕非常に精緻なさま。巧みなさま。〔東州〕東国のこと。ここでは江戸を指す。〔世途〕人生の道程。〔倏然〕疲れ果てたさま。〔楚囚〕郷里ではないところにいる人の例え。春秋時代の楚国の鍾儀は晋国に捕らえられたが、楚国の冠を外そうとはせず、常に被ることで祖国を忘れないようにしていた故事⁽¹⁸⁾による。〔芙蓉峰〕富士山の別称。蓮の花に似た峰の意。〔羈愁〕旅先で感じる愁い。旅愁。〔醉眸〕酒に酔った瞳。〔同人〕趣味や志を同じくする人々。〔臭味〕趣味や志向を同じくすること。〔献酬〕盃をやり取りする。〔清癯或如鶴〕清癯は、痩せてすらりとしているさま。宴の参加者の誰を指すかは、不明。〔鬢禿〕髪の水が抜けて、はげたさま。岩瀬華沼を指す。後述の頼杏坪の七言古詩に、「髻翁童々頭無毛(髻翁は童々にして、頭 無毛たり)」とある。〔一足癯〕牛の顔をして、角の無い蒼色の身体で、一本足の靈獸⁽¹⁹⁾。幼少の頃、足を病み歩行が不自由になった尾藤二洲を指す。〔千斤牛〕兕^じという一本角の蒼黒い牛。中国の神話に登場する動物⁽²⁰⁾。古賀精里のこと。頼杏坪『春草堂詩抄』巻五「追懷江都亡師友諸賢」に、「杏壇師道佑皇猷、蓮幕隣盟參廟謀、負重遠行君独在、世間無

復萬斤牛。精里先生、先生肥大。栗翁目謂萬斤牛。(杏壇の師道 皇猷を佑け、蓮幕の隣盟 廟謀に參ず、重きを負ひて遠くに行き 君独在り、世間に復た萬斤の牛無し。精里先生、先生肥大なり、栗翁目して謂ふに、萬斤の牛。)」とある⁽²¹⁾。〔鬚〕片足で歩くこと。〔駄〕荷物を背に乘せること。〔振々〕群がって飛ぶさま。〔泛々〕浮かび漂うさま。〔灌澆〕水をそそぐ。〔讐〕応答する。〔王霸〕王道と霸道。道徳にもとづいて天下を治める者を王といい、強権によつて天下を治める者を覇という。〔猷〕はかりごと。策略の意。もしくは、道。〔金蘭遊〕「金蘭」は意気投合した交友や深い友情をいう⁽²²⁾。「遊」は交わりを結んだ友のこと。『世説新語』賢媛篇に「山公与嵇阮一面契若金蘭(山公、嵇阮と一面して、契り金蘭の若し)」とあり、竹林の七賢である山濤、嵇康、阮籍が一度の出会いで金蘭の契りを交わしたことを典故とする。〔大息〕ため息。ため息をついて嘆くこと。〔阮劉〕「阮」は三国時代の魏人阮籍(二一〇—二六三)のこと。老荘の学を好み、酒と琴を愛し、形式的な礼法に反抗した。〔劉〕は西晋の劉伶(三二一?—三〇〇?)のこと。酒を好み、生死にさとりを開き、常に供の者に墓を掘るための鍬^{すき}を持たせていた。両者とも竹林の七賢。〔誕〕気ままにする。〔董賈〕「董」は董仲舒(前一七六年?—前一〇四年)のこと。前漢の儒学者で、景帝に仕えて博士となり、武帝に「挙賢良对策」で認められた。儒教を政治の基本思想とする道を開いた。「賈」は賈誼(前二〇〇?—前一六八年)のこと。前漢の政治家・文人で、賈生・賈太傅と称される。前漢の文帝に仕え、種々の改革を図るも、保守派に阻まれて左遷されたが、再び信任され、梁懷王の太傅となる。〔儔〕同類、たぐい。〔当路〕重要な地位。〔藉箸籌〕計略を指し示すこと。張良が劉邦の食前の箸を借りて、計略を指示した故事⁽²³⁾による。〔籌〕は計略のこと。〔贅瘤〕こぶ。無用なもの⁽²⁴⁾。〔世可更有否〕『栗山堂詩集』では、「世可更可否(世は更に可とすべきや不や)」とする。〔何不作図〕前述の栗山主催の後

赤壁の宴に参加しないことを残念がつて言うか。〔林邱〕郷里や隠遁の地のこと。

〔索居〕孤独に離れて暮らす。〔森寂〕奥深くひっそりと寂しいさま。

◎韻字 流・頭・喉・州・囚・愁・樓・眸・求・酬・猴・牛・休・鷗・讐・猷・謳・遊・儔・籌・瘤・邱・憂（下平声十一尤）

【補釈】

「縦今使贅瘤」の句以外は、句末に同一の字が使用されていない。また、「世可更有否」以外の韻字は、下平声十一尤で統一されている。併せて、「縦今使贅瘤」の句において前の句と同じ「瘤」の字を使つて読者の注意を惹き付け、次の「世可更有否」の句で他の句とは違う仄上声二十五有の韻脚を踏むことで、この句が特別目立つようにしている。

【意訳】

茶山がちょうど郷里に帰る時期に、我が対岳楼で諸君らと宴をした。そこで、私は谷文晁に絵を描くように勧めた。文晁は喜んで描いたところ、人物は実によく似ていた。

関西の楊伯起が志高く二流には落ちなかったように、菅茶山もまた故郷の黄葉山に隠居していながら一流の学者で、何度も呼び寄せられては仕官をするよう勧められたが、なかなか応じなかった。

朝に晩にと一日中酒を飲んで詩を詠み、茶山の詠んだ清らかな詩は、巧な人々に伝播するように詠われるので、評判はすぐさま藩主たちの耳に入り、江戸に呼び出された。体を急ぎ立て、江戸に向かって旅をしてき

たが、旅路に疲れたさまをみて、気の毒に思う。郷里を忘れず、疲れ果てた姿は、まるで晋に捕らえられた楚の鍾儀しやうぎのようだ。ただそこにある富士山だけが、旅の愁いを解くことができる。

雨が上がり晴れた日に酒と饗膳を携え、対岳楼を借りにやつて来た。楼の後ろには秋の山海の幸があり、こぞつて酔つた貴方の目の前にふるまう。

同じ趣味や志向を持つもの同士、後追いつたり、行つたり来たりして、互いに求めあう。あちらこちらに座つてるので、だれが賓客なのか主催者なのか分からなくなり、主人と客が入り乱れて盃を勧め合っている。痩せてすらりとしている人は、もしかすると鶴なのだろうか。髪の毛の薄い岩瀬華沼は、或いは猿なのだろうか。或いは尾藤二洲は、中国の神話に出てくる片足の夔きなのか。或いは古賀精里は兕しという千斤もの大きさの牛なのか。足が不自由であつても見事に舞い、汗をかいても背に荷物を載せて休むこともなく動いている。

或いは鷺のように群がつたり、或いは鷗のようにあちこちに漂つては、話に水をそそぎ、または互いにからかつたりする。或いは論争したり、互いに応酬したりする。或いは人の素質と運命の奥深さを語り合つたり、或いは王道と霸道について考え、謀りごとを述べたりする。或いは世の出来事のために息をついて嘆き、或いは古詩を長々と詠んだりする。互いに趣向が異なつていても、山濤たちが交わした金蘭の契りのような深い交友である。

竹林の七賢である阮籍や劉伶のように、気ままにしていると同じようなものだとは言つても、共に董仲舒や賈誼と同格の人物である。もし、

彼らをして重要な地位にしたならば、張良のように君主に対し計略を指示することができるだろう。

なんと残念なことだろう。彼らがその地位の外に置かれているとは。まるでこぶのように無用なもののようにあしらわれている。たとえ、無用のものとされたとしても、（神仙世界に行かず、）更にこの世にいるべきなのだろうか。

どうして江戸に在る間にもう一度宴をして絵を描き、持ち帰つて郷里で飾らないのか。友人と離れてひっそりと孤独に暮らす寂しい夜も、この絵を見て憂いを取り除くことができるのに。

（3） 古賀精里 五言古詩「新秋栗山堂集得韻支」（写真6）

（印）

新秋集栗山堂得韻支 新秋 栗山堂に集ひて韻支を得る

備中 菅君礼卿祇 藩侯之召／春間 備中の菅君礼卿、藩侯の東下／迨暇屢期遊賞／余以悼亡辞／諸子亦 召に祇して、春間に東下す。偶礙事不果／至是治食就宴於栗山堂 暇に迨びて屢遊賞を期す。乃得披豁 余、悼亡を以て辞し、諸子も亦た偶事に礙げられ果たせず。是に至りて食を治め、栗山堂に就宴す。乃ち披豁するを得たり。

選勝朱門客 勝を選ぶ 朱門の客
携樽会旧知 樽を携へ 旧知に会す

昨雨洗天地 昨雨 天地を洗ひ

炎景戢威時 炎景 威を戢むる時

商律蜻蛚鳴 商律 蜻蛚鳴き

園卉動涼颼 園卉 涼颼に動く

久要在臨汎 久要 臨汎に在り

樂事幾愆期 樂事 幾たびか期を愆ふ

通衢車轂擊 通衢 車轂撃ち

遊舫咽水湄 遊舫 水湄に咽す

静躁寧同趣 静躁 寧んぞ趣を同じくせんや

雅俗況異宜 雅俗 況んや宜しきを異にす

不若駿台上 駿台の上に若かず

憑高寨幔帷 高きに憑る 寨の幔帷

氣爽滅浮埃 氣爽にして 浮埃を滅す

万彙無遁姿 万彙 無遁の姿

歴々堪攬結 歴々 攬結に堪へ

江山簇秀奇 江山 秀奇に簇る

蹇我罹家厄 蹇 我 家厄に罹り

半年不展眉 半年 展眉せず

幸当残暑退 幸いに残暑退くに当たり

并得抱懷披 并びに抱懷 披くを得たり

留飲未渠央 飲に留まりて 未だ渠かに央きず

参横城樹枝 参 横たわる 城樹の枝

古賀樸具（印）（印）

【語釈】

「韻支」上平声四支のこと。『精里二集抄集』卷二「新秋栗山堂集得四支」⁽²⁵⁾（以下『精里二集抄集』という。）では「四支」とする。「春間」「古賀・西山・四明・海門・龍渚外十三名詩画」⁽²⁶⁾に収められる詩「新秋集栗山堂得韻支」（以下、「書画類182」という。）では、「春末」とする。「祇」参勤する主君に従い、江戸勤番する「祇役」のこと。「備中」「備後」の誤り。「迨暇屢期遊賞」「遊賞」は山川などに遊んで、風景を鑑賞すること。『精里二集抄集』では「屢訂游期（屢游期を訂む^{まぎ}）」となっており、また「書画類182」では「迨暇屢訂遊期（暇に迫りて屢遊期を訂む）」とする。「余以悼亡辞」「悼亡」は妻と死別すること。精里の妻は、文化元年（一八〇四）に没している⁽²⁷⁾。『精里二集抄集』では「余以悼亡不赴（余悼亡を以て赴かず）」とする。「諸子亦偶碍事不果」「精里二集抄集」では「而諸子亦偶碍事輒止（而して諸子も亦た偶、事に碍げられ輒ち止む）」とする。「至是治食」「治」は調達すること。または、取り揃えること。「書画類182」では「至是治厨（是に至りて厨を治む）」とする。「披豁」胸や心を開くこと。ここでは、妻と死別して沈んでいた気持ちが晴れたことを表す。また、併せて妻の喪に服していたことで遊宴に参加できず、茶山をはじめとする友に会えない残念な気持ちが晴れたことをいう。「朱門」身分の高い人の屋敷のこと。「戢」収めること。また、和らぐこと。「商律」秋の音律。「商」は音階の五音で五行説の「秋」に当たる。「蜻蛉」コオロギ。「卉」草の総称。「涼颺」涼しげな風。「颺」はさつと吹く涼しい風。「久要」以前からの約束。「臨汎」船を浮かべるに臨んで。隅田川での舟遊のことか。茶山は江戸滞在中の文化元年（一八〇四）三月十九日と

七月九日に隅田川で舟遊している⁽²⁸⁾。「通衢」四方八方に通じる道。転じて賑やかな土地。「車轂撃」「車轂」は車輪の車軸を通す部品「こしき」のこと。車のこしき同士が打ち合うことをいい、市街の繁華なさまをいう。「水涓」川のほとり。「況異宜」「精里二集抄集」では「原異宜（原より宜しきを異にす）」とする。「駿白」駿河台。上は旗本屋敷が集まり、下は市場が立った。栗山の邸宅は駿河台の上にあつた。「憑」物にもたれかかる。寄り添いつく。「塞」木を組んだ籬のこと。〔幔帷〕幕または、帷。「万彙」万物。『精里二集抄集』では「万類」とする。「歴々」はつきりとしたさま。また、一つひとつ。「攬結（景観などを）手中に収める。」「簇秀奇」「簇」は、むらがる。『精里二集抄集』では「競秀奇（秀奇を競ふ）」とする。「蹇」嘆息のことば。「ああ」。「展眉」眉をひらき、顔をほころばす。喜んだり安心したりするさま。「抱懷」心に抱く。胸中の思い。「留飲」『精里二集抄集』及び「書画類182」では、「耽賞」とする。「参」オリオン座の三つ星のこと。

◎韻字 知・時・颺・期・涓・宜・帷・姿・奇・眉・披・枝（上平声四支）

【意識】

初秋、栗山堂に集まり、「支」の韻を得て詠む。

備後の菅茶山は、藩主に召され、春の間に江戸へ来た。休暇の時に、しばしば会う約束をした。私は妻が亡くなったため辞退し、他の人達も諸用が入って約束を果たせなかった。ここに至って、ようやく料理を取り揃え、栗山堂で宴をすることができた。そうしてやっと沈んでいた気持ちが晴れた。

名勝の場を選んだ客が、高貴な屋敷に酒の樽を携えてやって来て、旧知の友と会う。昨日の雨が、天地を洗い、暑さが収まった時、虫の声が秋の旋律を奏で、庭園の草がさつと吹く涼風にそよぐ。以前から舟遊をしようとしていたが、この楽しい事は幾度、機会を失ったことか。

市中の道は車のこしきが打ち合つて喧騒し、舟遊の舟々は川のほとりに止まっている。どうして静けさと騒がしさの趣が同じであろうか。ましてや雅人と俗人では、良いとするものが違うのだ。しかし、その舟遊でさえ駿河台の上には及ばず、ここが一番趣が良い。高台に立つ籬の幕。空気は清々しく澄み、舞い上がった埃を消し、全てのものは隠しようのないそのままの姿で、一つ一つはつきりと見え、今にも手に取ることができそうな山川が、美しく連なっている。

ああ、私は妻を失い、半年、喜んだりがなかった。幸いにしてちようど残暑も去るのに併せて、胸中の思いも開放することができた。楽しい宴は続き、いまだすぐには終わらない。見上げれば、オリオン座が江戸城の樹の枝に横たわっている。

(4) 尾藤二洲 五言古詩「菅君礼卿讌諸子於柴氏後亭賦成八韻」(写真

7右)

(印)

菅君礼卿讌諸子於柴氏

菅君礼卿、諸子と柴氏の後亭に於ひて讌

後亭賦成八韻

し、賦して八韻を成す。

涼雨驅滯暑 涼雨 滯暑を驅り
簾攏自無塵 簾攏わせ 自ら塵無し

文海鷗鷺盟 文海に 鷗鷺の盟

詞壇老主人 詞壇に 老主人

主人素愛客 主人 素より客を愛し

許客更邀賓 許客 更に賓に邀ふ

賓筵何秩々 賓筵 何ぞ秩々たり

群英何彬々 群英 何ぞ彬々たり

清風吹滿座 清風 吹きて座に滿つ

素月上城闌 素月 城闌に上る

沈李而浮瓜 李を沈めて 瓜を浮べ

醺酒以擊鮮 酒を醺み 以て鮮を撃つ

勝致有如此 勝致 此の如く有り

誰不放其神 誰か 其の神を放たざるや

況茲陸沈者 況んや茲に陸沈する者

方駕竟夕觀 方駕 竟夕の觀

二洲肇具草 (印) (印)

【語釈】

「八韻」脚韻の数をいう。「六如上人 岡田 尾藤 古賀 三博士詩 栗翁尺牘」²⁹に収められる二洲の詩(以下「書画類167」という。)は「七韻」とする。「詩画卷」の詩にある九句目と十句目が省かれているため、脚韻の数が七になった。「讌」宴や酒盛

りをする。〔攏〕くくり集めること。〔文海〕文壇のこと。〔鷗鷺盟〕鷺約」と〔鷗盟〕のこと。世俗を離れた風流な交際。鷗も鷺も自由なことを表現するとき使用される。〔許客〕〔許〕は認める。招待した客のこと。〔賓筵何秩々〕〔賓筵〕は客をもてなす宴の席。〔秩々〕は秩序正しく整っているさま。『詩経』小雅「賓之初筵」を典故とするか⁽³⁰⁾。〔群英〕賢人たち。『静寄軒集』巻四の「菅君礼卿譙諸子於柴氏後亭賦成八韻」⁽³¹⁾（以下『静寄軒集』という。）及び『書画類167』では、「群彦」とする。〔彬々〕文（外面の飾り）と質（内容）が、兼ね備わっているさま⁽³²⁾。〔素月〕白く明るい月。〔闔〕城門を守るために、城門に重なるように突き出した半円状の門。〔沈李而浮瓜〕消夏遊樂の行事⁽³³⁾。〔擊鮮〕獸を殺して新鮮な肉を取る。〔勝致〕高尚なおもむき。〔放其神〕心を自由にする。『静寄軒集』では、「怡其神（其の神を怡ばしむ）」とする。〔陸沈者〕〔陸沈〕は隱者が俗世の中に隠れて暮らすことのたとえ⁽³⁴⁾。『書画類167』では「陸沈侶」とする。〔方駕〕二つのものが肩を並べて優劣のないこと。〔竟夕〕一晩中。

◎韻字 塵・人・賓・彬・闔・神（上平声十一真）鮮・（下平声一先通韻）・觀（上平声十四寒通韻）

【意訳】

菅茶山は諸儒と柴野邸の後亭で宴を催し、八つの脚韻の詩を作る。

涼をもたらす雨が、長く留まっていた暑さを駆り立てるように追いやった。簾を上げれば、自然と塵も無くなっていた。文壇には世俗を離れた親交があり、詩壇には老主人である茶山がいる。老主人は以前からずっと客たちを親愛し、招待した客を更に賓客としてもてなす。この宴席は、

なんと礼儀正しく整っていることか。この場にいる賢人達は、なんとその内面と外面が兼ね備わっていることか。

清々しい風が吹いて、宴席いっぱいに広がり、白く輝く月が江戸城の門に上る。李を冷水に沈め、瓜を浮かべて涼をとり、酒を酌み、そして新鮮な肉が供される。宴はこのように高尚で素晴らしいものだった。

いったい誰が心を自由に解き放てないというのだろう。この宴では皆、自由にできるのだ。ましてや彼らは市井の中で自由に暮らす隱者だ。優劣もなく肩を並べ、一晩中、景色を眺める。

（5） 岩瀬華沼 五言古詩（写真7左）

（印）

攀得芝蘭室 攀得す 芝蘭室^{はんとく しらのむろ}

同胞此見招 同胞 此に招かる

深林交樸遯 深林 樸遯に交はり^{はくそく}

靈鳥伴鷓鴣 靈鳥 鷓鴣を伴ふ^{しやうりやう}

朝雨輕陰散 朝雨 輕陰を散らし

夕晴殘暑消 夕晴 殘暑を消す

雲侵滄海近 雲 侵して 滄海 近く^{そうかい}

岳対赤城遥 岳 対して 赤城 遥かなり

緩歩警零露 緩歩して 零露に警き^{かんぱ れいろ おどろ}

歛言入蓼蕭 歛言して 蓼蕭に入る^{りくしやう}

無憂孔融坐 憂ひ無し 孔融の坐

遺愛楚人騷」遺愛す 楚人の騷
絃外梁塵動 絃外 梁塵 動き
歌中郢雪飛」歌中 郢雪 飛ぶ
帰来備公廟 帰り来たれ 備公の廟
応憶聖明朝」^ま 応に憶ふ ^{おも} 聖明の朝

盤行言拌具（印）

【語釈】

「攀」よじ登る、慕う。「芝蘭室」「芝蘭」は靈芝と蘭のこと。ともに芳香のある植物。道德や才能の優れた人のたとえ。立派な人と交われば、自然に同化されることをいう⁽³⁵⁾。ここでは善人の集まりのこと。「樸遯」群生した小さな樹木のこと⁽³⁶⁾。転じて、凡庸なことのたとえ。「鷓鴣」ミソサザイ科の小鳥。ミソサザイは森林に巣を作る。小さな存在の意。『莊子』逍遙遊に「鷓鴣巢於森林、不過一枝。（鷓鴣は森林に巣くふも、一枝に過ぎず。）」とあり、前句の「森林」は次句の「鷓鴣」に繋がるキーワードになっている。「輕陰」薄曇。「滄海」または、「蒼海」。大海原のこと。「赤城」赤く染まった城。ここでは江戸城のこと。「緩歩警零露、歛言入蓼蕭」「零露」はしたたり落ちる露。「蓼蕭」は成長したヨモギ。『詩經』小雅「蓼蕭」に、「蓼彼蕭斯、零露漙漙（蓼たる彼の蕭に、零露漙たり）」とあり、その注釈書『毛詩正義』の毛序に、「蓼蕭沢、及四海也。（蓼蕭は沢、四海に及ぶなり。）」とあり、朱熹の『詩集伝』注に、「諸侯朝于天子、天子与之燕、以示慈惠。故歌此詩。（諸侯、天子に朝するや、天子之と燕し、以て慈惠を示す。故に此の詩を歌ふ。）」とある。故に、天子との宴でその慈惠を賜る比喩。ここでは茶山の慈惠を賜るの意。「無憂孔融坐」孔融（一五三

〜二〇八）は後漢の儒者。字は文舉。北海の相となり孔北海とも呼ばれる。孔子二十世の孫。建安七子の一人。漢室に忠誠を尽くした。『蒙求』の「孔融満坐」をいう。職を退いた孔融のもとには来客が絶えず、常にそうであれば憂いはないと孔融は歎じていたこと⁽³⁷⁾を典故とし、茶山のもとにも来客は絶えないことをいう。「遺愛」いつまでも敬愛されること。ある人の仁愛が退官後、または死後にまで慕われること。「楚人騷」「楚人」は屈原（前三四三？〜前二七七？）のこと。戦国時代の楚の三閭大夫で楚王の一族。屈は氏、姓は芈^び、名は平、字は原、号は靈均。『楚辞』の代表的作家。三閭大夫となったが、人の嫉みを受けて、讒言により追放された。「騷」は屈原が追放された後に詠んで志を示した賦「離騷」のこと。「絃外梁塵動、歌中郢雪飛」「梁塵」は梁の上の塵のこと。優れた音楽のたとえ⁽³⁸⁾。「郢」は春秋戦国時代の楚の都。「歌中郢雪飛」は『文選』巻四十五「対楚王問」が典故。屈原の弟子で、戦国時代の楚の大夫だった宋玉に、楚の襄王が民衆に賞賛されない理由を尋ねた際、自分の言動が理解されないのは、それがあまりにも高尚であるからだとする宋玉の答え⁽³⁹⁾を踏まえ、高尚な曲や詩を意味する。ここでは宴で詠まれた詩を称揚している。なお、初唐の李嶠が「歌」という五言律詩の中で「郢中吟白雪、梁上繞飛塵（郢中白雪を吟じ、梁上繞りて塵を飛ばす）」と詠んでいる⁽⁴⁰⁾。「帰来備公廟」「備公廟」は吉備真備の廟。吉備公廟は現在の倉敷市真備町箭田とされている。なお、茶山は文化十二年（一八一五）の二回目の江戸出向からの帰途に吉備公廟の近くを通り、江戸から二千里も歩いて、いよいよ明日には故郷に帰ると、帰郷したことを実感する場所として「備中道上次岡生韻二首」中に詠んでいる⁽⁴¹⁾。「帰来」は『楚辞』の「招魂」が典故。また、茶山が備後国への帰郷前であることを踏まえている。「聖明朝」「聖明」は知徳に秀でたさま、またそのような聖人や天子のこと。「朝」は集まる、会合する。栗山堂での宴のことも指す。

◎韻字 招・鶴・消・遙・蕭・朝（下平声二蕭）騷（下平声四豪通韻）飛（上平声五微換韻）

【意訳】

優れた方を慕い御一緒していると、その賢人の集まりに同席することができ、同胞と共にこの栗山邸に招かれた。

森林のように懐の深い茶山は、凡庸な私と交流してくださり、霊鳥のように尊い彼は、小鳥のような卑小な私を引き連れてくださった。

朝の雨は薄曇を散らし、夕晴れは残暑を払う。雲は蒼い大海原に近づき、富士山は夕焼け色に染まった江戸城に向かって、遙か遠くにそびえ立っている。

ゆっくり歩けば、高德な方である茶山の恩恵に驚き、歓談すれば、茶山の慈恵の中に入る。

孔融の家には常に来客が訪れて憂いが無かったように、茶山のもとにも来客は絶えず、屈原の「離騷」の詩ように、茶山の詩もいつまでも愛される。茶山の詩は、弦から離れたところでは梁上の塵を動かし、歌中では白雪が飛ぶ。まるで、楚の郢で詠われた高尚な歌のようだ。

帰って来てください、吉備公の廟へ。帰郷前のこの宴で古に思いをはせる。きっと吉備公たちは、私たちと同じように宴をしていることだろう。

(6) 頼杏坪 七言古詩(写真8)

(印)

茶山与我山陽人 茶山と我 山陽の人

薇尾芸頭二人親 薇尾芸頭 二人親なるも

一朝拘束見恆罕 一朝拘束 見ゆること恆に罕なり

回首独与江山隣 回首して 独り与にす 江山の隣

不虞今年同来此 不虞にして今年 同に此に来たり

詩酒追隨連幾句 詩酒追隨し 連ぬこと幾句

都下賢豪鬱如雲 都下の賢豪 鬱ること雲の如し

宛然餓人就廩困 宛然として 餓人 廩困に就く

柴公德業一世高 柴公の徳業 一世高し

尾古昌平双旌旄 尾古 昌平の双旌旄

寒泉明決如快刀 寒泉の明決 快刀の如し

雪堂雅澹月下舫 雪堂の雅澹 月下の舫

磐翁童々頭無毛 磐翁 童々にして 頭 無毛たり

文章自如戴山鰲 文章 自如として 山を戴く鰲

善卿低声出奇論 善卿 低声にして 奇論を出し

大笑時作虎豹嘯 大笑して時に作す 虎豹の嘯

对岳楼上爛巾袍 对岳楼の上 爛く巾袍

此会殊無一賢逃 此の会 殊に一賢の逃るる無し

坐久三峰雪色暮 坐すこと久し 三峰 雪色暮る

瑠璃碗裡燒蘭膏 瑠璃碗の裡 蘭膏を焼く

既角而牙将何饕 既に角いて牙む 将に何をか饕らん

自嘲吾欲深塹壕 自嘲して吾 欲す 塹壕を深くせんと

顧借群賢二三年 群賢に顧借せらるること 二三年

左琴右書乗一船「琴を左にし 書を右にし 一船に乗る

来往芸薇千島間 来往す 芸薇 千島の間

喫尽牡蠣処々田 喫ひ尽す 牡蠣 処々の田

芸人斥鹵作田種 蠣味為天下第一 芸人、斥鹵、田種と作す。 蠣味、天下第一為り。

頼惟柔拝具（印）（印）

【語釈】

「独与」一人待つとの意。「宛然」あたかも。または、ちようど。「廩困」米蔵。「廩」も「困」も米蔵の意。「二世高」その時世に最も高いの意。蘇軾が元豊五年（一〇八二）七月十六日の夜に赤壁^{〔42〕}で舟遊して詠んだ「赤壁賦」の中で、曹操の実力を、「一世之雄」と詠む箇所を典故とする。「旌旄」軍中での指揮用の旗。蘇軾の「赤壁賦」の中で、曹操の赤壁に向かう船団のことを「旌旗蔽空」と詠む箇所を典故とする。「雪堂」蘇軾が左遷先の黄州で、元豊五年冬に大雪の中で築いた住居のこと。ここでは対岳楼をいう。「雅澹」高尚で心持ちが平静なさま。「月下舸」蘇軾の「赤壁賦」又は「後赤壁賦」にみる舟遊を典故とする。「童々」樹木に枝葉のないさま。また、清らかで光っているさま。「自如」落ち着いて動かないさま。「文章」内にある徳が言動にあらわれていること^{〔43〕}。「戴山鰲」鰲は大亀。伝説上の巨大な亀で、海中に住み、蓬萊などの仙山を背負うという。「虎豹嘯」「虎豹」は「後赤壁賦」で蘇軾が座った岩の形を典故とする。「嘯」は獣が吠えること。獣の鳴き声のこと。「後赤壁賦」で蘇軾が突然長嘯することを踏まえて詠むか。「蘭膏」蘭の香をこめた油^{〔44〕}。「顧借」「顧」は気にかける、思いやる。「借」は貸し与える、援助する。「左琴右書」「列女伝」

卷二賢明「楚於陵妻」に、「左琴右書、楽亦在其中矣。（琴を左にし、書を右にし、楽しみも亦た其中に在り。）とあり、どちらも文人にとって欠かせないものであり、文人を象徴するもの。「斥鹵」塩分が多く耕作できない土地。東方では斥、西方では鹵という。ここでは干潟をいう。江戸時代、安芸国では干潟に竹や木の枝を立て、牡蠣の卵を付着させて養殖する「ひび立て養殖法」が行われていた。

◎韻字 親・隣・旬・困・（上平声十一真）旌・舸・鰲・嘯・逃・膏・壕（下平声四豪換韻）船・田（下平声一先通韻）

【意訳】

茶山と私は同じ山陽の人で、隣接した備後と安芸におり、二人の間には親交があるが、仕事に拘束され、お会いできるのは、いつも稀だ。美しい山水に行つては、振り返りあなたをお待ちしていた。

思いがけず今年、共にここに来た。詩や酒を振る舞う後ろに追従し、何度廻つただろう。江戸城下の才知に優れた人々が、まるで雲のように群がっていて、その中にいる私は、あたかも飢えた人が米蔵にいるかのようだ。

柴野栗山の徳のある業績は、曹操のようにこの時世で最も高く、尾藤二洲と古賀精里は、昌平黷においては曹操の船団が掲げる一対の指揮旗のようだ。岡田寒泉の優れた決断は、切れ味の良い快刀のようだ。（そのような彼らが集う）蘇軾の雪堂の如き対岳楼は気高く平静なところで、まるで「赤壁賦」や「後赤壁賦」にあるように、月下に浮かべた舟の中で催される宴と同じようだ。

磐翁（岩瀬華沼）は清らかで光っており、頭も毛がなく光っている。言

動は内にある徳が現れ、ゆつたりと落ち着いていて、まるで山を背負っている鰲という大亀のようだ。倉成龍渚は、低い声で奇論を出す。大いに笑い、その声は時に力強く、まるで蘇軾が座った岩の虎豹のように吠えているかのようだ。

対岳楼の上を光り輝く雲が、袍のように覆っている。この宴では、とりわけどの賢者も帰ることなく、この場を離れないでいる。

ずっと座り富士山の三峰を眺めていると、だんだんと峰の雪が夕焼け色に染まってきた。瑠璃碗の中で蘭膏を焚いたように、瑠璃色の夜空に花の良い香りが漂っている。

こんな夜になってもまだ争って噛んでいるが、これ以上何を食ろうとしているのか。我ながら可笑しい。塹壕を深く掘っていくように更に欲しくなっている。多くの賢者に気かけ助けていただくこと数年、左には琴、右には書を携え、一艘の舟に乗り、安芸と備後の間にある数多の島々抜けて往来した。その間に私は、安芸国のあちらこちらの田で養殖された名物の牡蠣を食べ尽くしたというのに。

安芸国の人には干潟に竹や枝を立てて田のようにして、立てた棒に牡蠣の卵を付着させて育てる。その味は天下一品だ。

(7) 倉成龍渚 七言古詩(写真9右)

(印)

登台氣象自嵯峨 台に登り 氣象 自ら嵯峨たり
富岳雲分瀛海波 富岳の雲 瀛海の波

一代文章花吐筆 一代の文章 花 吐筆す

満盤珍異酒如何 盤に満つ珍異の酒を如何せん

胡栗妙曲青衫濕 胡栗妙曲 青衫 濕し

越客悲吟白首多 越客悲吟 白首 多し

日後洋々但盈耳 日後洋々として 但だ耳に盈つ

自今值咲醉客配 自今 咲に値たる 醉客の配

倉平拝 (印) (印)

【語釈】

〔氣象〕景色。〔嵯峨〕山が高く険しいさま。〔富岳〕富士山。〔瀛海〕大海。〔胡栗地方の料理。『龍渚先生遺稿』巻八「菅礼卿設宴栗山先生対岳楼」(45)以下『龍渚先生遺稿』という。)では「胡琴」とする。〔青衫〕青色の単衣の着物。唐代は身分の低い文官が着た官服。〔越客〕地方の客。〔白首〕白髪頭。老人。〔白首窮経〕で、老年になるまで経書を研究するという意。〔值咲〕『龍渚先生遺稿』では、「休笑(笑くに休し)」とする。〔配〕酒を飲んで酔って顔が赤くなる。

◎韻字 峨・波・何・多・配(下平声五歌)

【意訳】

駿河台に登ると、高く険しい山々の景色が、自然と目に入ってくる。富士山の雲は、まるで大海の波のようだ。この時世で最高の詩文が花開くように書かれる。なみなみと注がれた珍酒をどうやって飲むうか。

地方の料理を食べ、妙なる曲を聴いて、官服の袖を濡らす。地方から来た者たちは、郷愁に駆られ、悲しみを込めて詩を詠む。なんと白髪の老人

の多いことか。その妙曲と詩は、この後もずっと耳の中に満ちて響いている。これからは、宴客の顔を酔いで赤く咲かせるのにちょうど良い頃合いだ。

(8) 岡田寒泉 五言絶句「陪 菅君礼卿宴于对岳楼」(写真9左)

陪 陪ふ

菅君礼卿宴于对岳楼 菅君礼卿、对岳楼に宴す

秋日駿台宴 秋日 駿台の宴

高楼西望寒 高楼 西のかた寒を望む

芙蓉千古雪 芙蓉 千古の雪

佐我一杯飲 我に佐^すむ 一杯の飲

寒泉恕具 (印)(印)

【語釈】

「陪」添える。「芙蓉」芙蓉峰のこと。富士山の別称。

◎韻字 寒・飲(上平声十四寒)

【意訳】

(詩)を添える

菅茶山が对岳楼で宴を催す

秋の日に駿河台で宴をする。

对岳楼の西に寒冷なるものを望み見る。

富士山には、太古からの雪がある。

その景色が、私に更なる一杯の酒を勧めるのだ。

4 おわりに

以上、「詩画卷」にある詩の翻刻と訳注を紹介した。年齢や役職を超えて、文人として分け隔てなく交流した様子が、生き生きと詩に詠まれていた。

彼らの詩に共通してみられるのは、富士山の見える美しい景色や料理、音楽や詩への賞賛である。また、岡田寒泉以外の詩では、参加者への尊敬と賛辞が、典故を用いながら巧みに詩に詠まれている。

柴野栗山は、参加者を靈獣へと変化させ、あたかも伝説やお伽話にみられる神仙世界の宴に擬えている。また、参加者を靈獣にすることで、世俗から離れた存在であることを巧みに表現している。頼杏坪もまた同様に、吉兆の動物として描かれる亀や虎豹に参加者を例えていた。

また、岩瀬華沼は、『詩経』や『楚辞』などの典故を多用し、この宴がそれらに見られるような聖人君主たちが催す神聖で高貴な宴と匹敵する宴であることを表現している。

言うまでもなく、これらの敬意と賛辞は、宴の参加者も勿論ではあるが、

とりわけ留別の宴を主催した茶山へ向けたものに他ならない。彼らにとつて茶山との交流がどんなに貴重で素晴らしいものであったかが、これらの詩から読み取れるのである。

翻つて茶山に意識を向けると、茶山はこの宴を開くにあたって、蘇軾の「赤壁賦」の宴を意識したのかどうか疑問が残る。

蘇軾の「赤壁賦」及び「後赤壁賦」は、画題や詩文の題材によく取り上げられ、七月十六日が「赤壁賦」で詠まれた宴の日であることは、文人であればよく知っているはずである。鈴木芙蓉が「蘇遊図」を描いたこと、頼杏坪がこの「詩画卷」の中で「赤壁賦」及び「後赤壁賦」を典故にしていること、また栗山が「蘇遊図」の賛にみられるように例年十月十五日に後赤壁の宴を開いていることを考えれば、少しは意識していたのではないかと推測する。

ただし、留別の宴が「赤壁賦」の宴の二日後であること、また、茶山を含め杏坪以外の参加者が意識的に赤壁賦を典故に詩を詠んでいない⁽⁴⁶⁾うえ、そのことについての直接的資料が今のところ見当たらないため、推測の域を出ない。今後の研究課題としたい。

本稿を書くにあたっては、三井記念美術館の藤原幹大氏及び石川県立歴史博物館の中村真菜美氏には、研究資料を御提供いただいた。財団法人共済会郷土博物館及び日本学士院には、資料の画像を御提供いただいた。また、広島県立歴史民俗資料館の西村直城氏には、翻刻について御教示をいただき、頼山陽史跡資料館の花本哲志氏及び徳島文理大学の久下実氏には、参考資料に関し御協力を賜った。当館の岡野将士氏には、翻刻・語釈及び意識をはじめ、細部に亘って御助言を賜った。ここに厚く御礼

申し上げます。

【注】

- 1 翻刻は、岡野将士氏から提供を受けて参考にした。
- 2 参考資料6四五九頁に掲載。「是文晁栗山堂席上所画、余携帰遺桑田伯彦。後七年寄乞余題。所謂諸賢尾藤古賀二博士、岡田明府、岩瀬典客、倉成頼二文学、木芙蓉画史、别有善胡琴者。今忘其名。(是れ文晁、栗山堂の席上にて画きたる所、余携へて帰り、桑田伯彦に遺る。後七年、寄せて余に題せんことを乞う。所謂諸賢は、尾藤古賀二博士、岡田明府、岩瀬典客、倉成頼二文学、木芙蓉画史、別に胡琴を善くする者有り。今、其の名を忘る。)」とある。

- 3 発表は、令和四年(二〇二二年)一月二十二日、美術史学会西支部例会で行われ、参考資料12はこの発表をまとめた論考。

- 4 「文化紀元七月十八日、借後堂招飲諸賢。會者、尾古二博士、岡田明府、岩倉頼三文学、谷鈴二画史、一陶真、併橋梓主人先生及余、十二人、詩畫盤飲。蒼龍西没、乃散。備後菅晉師記(文化紀元七月十八日、後堂を借りて諸賢を招飲す。會者は、尾古二博士、岡田明府、岩倉頼三文学、谷鈴二畫史、一陶真、併びに橋梓主人先生及び余、十二人、詩画盤飲す。蒼龍西没し、乃ち散ず。備後菅晉師記す。)」とあり、「陶真」は盲目の琵琶語りの芸人のこと、「橋梓」は橋木と梓木のこと、父と子を表す。ここでは、栗山とその養子の柴野碧海(一七七三～一八三五)のことを指す。

柴野碧海は、名を允升、字を応登または吉甫などで、号は碧海、通称平次郎という。栗山の弟の柴野貞毅の次男として生まれ、後に栗山の養子となる。江戸で栗山らに学び、徳島藩儒として寺島学問所の教授を務める傍ら、藩主の侍講

を務めた。

5 藤原・中村両氏は参考資料12三三頁の「2. 雅宴図を餞贈する意味」の中で、「詩画卷」を見返したことによって、「詩画卷」の中にない柴野碧海のことが「抜け落ちた」とし、「詩画卷」が「茶山の記憶に強い影響を与えた」と述べている。

6 参考資料10第一図参照。藤原・中村両氏は、参考資料12六頁の「2. 画中人物の比定」の中で、「詩画卷」の「全体の控えであったと想定」している。

7 参考資料11一頁掲載。

8 参考資料10二十三頁から二十四頁掲載。

9 参考資料10一頁、第一輯第二回到「列席の一人谷文晁が例の敏腕を揮ふて其光景を寫生したるもの即ち此圖にして一は茶山、一は栗山に贈りたるものなり」と云ふとある。

10 柴野碧海は久保桑閑の墓碑銘を書いているが、その中に「季は嘗て先君に請い、翁の墓を表わさんとし、未だ作るに及ばずして先君没す。是に於いて升をして之を記さしむ。（末子がかつて先代の柴野栗山に翁の墓碑文を依頼したが、作り上げる前に先代は亡くなった。そこで今度は私、充升にこれを書かせた。）」（参考資料23一〇頁～一一頁に掲載。）とあり、柴野・久保両家の親交の程が窺える資料の一つである。

11 谷文晁の落款は、「甲子初秋十八日 茶山席上得青韻如此 文晁（甲子初秋十八日 茶山の席上に青韻を得るに此の如し 文晁）」、鈴木芙蓉の落款は、「茶山席上分得十灰 芙蓉木雍写（茶山の席上に十灰を分得し、芙蓉木雍写す）」。

宴席では、韻字を分かち合つて詩を作り、その時に作つた詩の題には、「得」や「分得」と題することが多い。「青韻」も「十灰」も水平韻の韻目の一つで、落款から文晁は下平声九青の韻、芙蓉は上平声十灰の韻を担当したと推察する。

担当した韻を踏んだ詩を先に作り、その後、その詩に詠んだ風景を描いたのではないかと思われる。もしくは、中国の文人が詠んだ「青韻」及び「十灰」韻の詩を、それぞれ描いたとも推測する。この宴席上で詠んだ文晁及び芙蓉の詩は現在不明であり、中国の文人の詩もまた、いずれの詩なのか不明。今後の調査検討課題である。

12 蘇軾の字は子瞻、号は東坡居士。眉州眉山（四川省眉山県）の人。嘉祐二年（一〇五七）二十一歳で進士に及第し、欧陽修に認められるが、王安石と衝突し左遷され、各州の知州（知事）を歴任。元豐二年（一〇七九）に王安石の新法を批判する詩を作つた咎で罰せられ、黄州（湖北省黄冈県）に左遷される。

13 『古文真宝 後集』卷一所収のものを参照した。

14 『晋書』卷九十二 文苑・張翰伝に、「翰因見秋風起、乃思吳中菰菜、蓴羹、鱸魚膾、曰、人生貴得適志、何能羈宦數千里以要名爵乎。遂命駕而歸。（翰、困りて秋風起こるを見て、乃ち吳中の菰菜、蓴羹、鱸魚の膾を思ひて曰はく、人生、志に適ふを得るを貴ぶ。何ぞ能く數千里を羈宦して、以て名爵を要めんや。遂に駕に命じて歸る。）」とある。

15 参考資料15二八頁では、大意を「老蓮はこの宴席に出席せず、別にこの図を描いて言うことには「この図は後赤壁賦の初段である。これで会に欠席したことは許されるだろう。仲間からはずさないで欲しい」としている。

また、参考資料16五五頁では、「芙蓉は画を描き損ない、その責を塞ぐため、茶山が備後に歸る直前に一図を描いて進呈した」と解釈している。

16 『後漢書』卷五十四 楊震列伝に、「諸儒為之語曰、関西孔子楊伯起、常客居於湖、不答州郡礼命數十年、（中略）年五十乃始仕州郡。（諸儒、之が為に語りて曰はく、「関西の孔子、楊伯起」と。常に湖に客居し、州郡の礼命に答へざること

数十年、(中略)年五十にして、乃ち始めて州郡に仕ふ。」とある。

17 参考資料17五十七頁参照。

18 『春秋左氏伝』成公九年に見る。

19 『山海経』大荒東経第十四に、「状如牛蒼身無角一足。(状、牛の如く、蒼身、角無く一足なり。)」とある。

20 『山海経』海内南経第十五に、「兕在舜葬東湘水南。其状如牛蒼黒一角。(兕、舜葬の東、湘水の南に在り。其状、牛の如く、蒼黒、一角なり。)」とある。

21 参考資料18二四六頁参照。

22 『易経』繫辞伝上に、「二人同心、其利断金。同心之言、其臭如蘭。(二人心を同じうすれば、其の利きこと金をも断つ。同心の言、其の臭は蘭の如し。)」とある。

23 『史記』留侯世家に、「臣請藉前箸、為大王籌之。(臣請ふらくは、前箸を藉りて、大王の為に之を籌せん。)」とある。

24 『楚辞』九章「惜誦」に、「竭忠誠以事君兮、反離群而贅疣。(忠誠を竭くし以て君に事へ、反つて群を離れて贅疣とせらる。)」とある。

25 参考資料17四七九頁参照。

26 参考資料25一一四頁、書画類182。精里の詩は栗山堂の宴の当日に書かれたものか。

27 参考資料19九八一頁参照。

28 三月十九日の舟遊は参考資料6二九六頁、巻七の「同大家印南今川剛侯伊沢安泛墨陀川即事」に見える。七月九日の舟遊は参考資料1五一頁、五二頁の「墨水詩画卷」に見える。

29 参考資料25一〇四頁、書画類167。二洲の詩は栗山堂の宴の当日に書かれたものか。

30 「賓之初筵、左右秩秩(賓の初めて筵するとき、左右秩秩たり)」とある。

31 参考資料17一三八頁参照。

32 『論語』雍也に、「文質彬彬、然後君子。(文質、彬彬として、然る後に君子たり。)」とある。

33 『文選』卷四十二 曹丕「与朝歌令吳質書」に、「浮甘瓜于清泉、沈朱李于寒水。(甘瓜を清泉に浮かべ、朱李を寒水に沈む。)」とある。

34 『莊子』則陽第二十五に、孔子が楚の国に弟子と向かう途中に、貧賤の様子夫婦と男女の召使いに出会い、それらを聖人とその召使いだと評した言葉に、「是聖人僕也。是自埋於民、自藏於畔。其声銷、其志無窮。其口雖言、其心未嘗言。方且与世違而心不屑与之俱。是陸沈者也。(是れ聖人の僕なり。是れ自ら民に埋もれ、自ら畔に藏れたり。其の声銷へども、其志は窮り無し。其の口言ふと雖も、其の心未だ嘗て言はず。方に且に世と違りて、心之と俱にするを屑しとせず。是れ陸沈なる者なり。)」とある。

35 『孔子家語』六本に、「与善人居、如入芝蘭之室。久而不聞其香。即与之化矣。(善人と居るは、芝蘭之室に入るが如し。久しくして其香を聞かず。即ち之と化す。)」とある。

36 『詩経』召南の「野有死麕」に、「林有樸遯、野有死鹿(林に樸遯有り、野に死鹿有り)」とあり、その毛氏注と朱熹の『詩集伝』注に樸遯は「小木也」とある。

37 「性寛容少忌、好士、喜誘益後進。及退閑職、賓客日盈門。常歎曰、坐上客恒満、樽中酒不空、吾無憂矣。(性、寛容にして忌むこと少なく、士を好み、喜んで後進を誘益す。閑職に退くに及んで、賓客日に門に盈つ。常に歎じて曰く、坐上客恒に満ち、樽中の酒空しからずんば、吾憂ひ無からん。)」とある。

38 『文選』卷十八 嘯賦「成公子安」の李善注に、「劉向別録曰、有人歌賦、楚漢興

以来、善雅歌者、魯人虞公。発声清哀、遠動梁塵。（劉向の別録に曰はく、人、歌賦す有り。楚漢興りてより以来、善く雅歌する者、魯の人虞公なり。声を発すれば清哀にして、遠く梁塵を動かす。）とある。

39 「楚襄王問於宋玉曰、先生其有遺行与。何士民衆庶不誉之甚也。宋玉対曰、唯、

然。有之。願大王寛其罪、使得畢其辞。客有歌於郢中者、其始曰下里巴人、国中属而和者数千人。其為陽阿薤露、国中属而和者数百人。其為陽春白雪、国中属而和者不過数十人。引商刻羽雜以流徵。国中属而和者不過数人而已。是其曲弥高、其和弥寡。（中略）夫聖人瑰意琦行、超然独处。夫世俗之民又安知臣之所為哉。（楚の襄王、宋玉に問ひて曰はく、先生、其れ遺行有るか。何ぞ士民衆庶誉めざるの甚しきやと。宋玉対へて曰はく、唯、然り。之有り。願はくは、大王、其罪を寛し、其の辞を畢くすを得しめよ。客、郢中に歌ふ者有り。其の始めは下里巴人と曰ふ。国中属ひて和す者、数千人。其の陽阿薤露を為すに、国中属ひて和す者、数百人。其の陽春白雪を為すに、国中属ひて和す者、数十人に過ぎず。商を引き羽を刻み、雜ふるに流徵を以てす。国中の属ひて和す者、数人に過ぎざるのみ。是れ其の曲弥高くして、其の和弥寡なし。（中略）夫れ聖人は瑰意琦行、超然として独り処る。夫れ世俗の民、又安くんぞ臣の為す所を知らんやと。）」

40 「漢帝臨汾水、周仙去洛浜、郢中吟白雪、梁上繞飛塵、響發行雲駐、声随子夜新、願君聴扣角、当自識賢臣（漢帝汾水に臨み、周仙 洛浜を去る、郢中 白雪を吟じ、梁上繞りて塵を飛ばす、響き発して 行雲駐め、声随ひて 子夜新たなり、願はくは君 扣角を聴き、当に自ら賢臣を識るべし）」

41 参考資料6五九五・五九六頁、後編卷六の第一首に、「棣棠躑躅一叢叢、大路 蔡回山影中、行認黃薇祠廟近、隔林金鐸響丁東（棣棠躑躅 一叢叢、大路 蔡回す

山影の中、行きゆき認む 黃薇祠廟の近きを、林を隔つ金鐸 響き丁東たり）」第二首に、「帰興明日旧林叢 旅況陶陶醉夢中、花影鶯声二千里、行程発自富士東（帰興す明日 旧林の叢、旅況 陶陶として醉夢の中、花影鶯声 二千里、行程は富士の東より発す）」とある。

42 この赤壁は、湖北省樹黃州府城の西北、漢川門外にある。

43 『論語集注』公治長朱注に、「文章、徳之見乎外者、威儀文辞皆是也。（文章、徳の外に見るは、威儀文辞、皆是なり。）」とあり、「威儀」は礼式になつた動作や態度のことで、「文辞」は文章や詩文のこと。

44 『楚辞』『招魂』第九段に、「蘭膏明燭、華容備些（中略）蘭膏明燭、華燈錯些（中略）」とある。この句の後に、「結撰至思、蘭芳假些、人有所極、同心賦些、酌飲尽飲（至思を結撰して、蘭芳假いなり、人極る所有り、心を同じうして賦す、酌飲して飲を尽くす）」と続き、宴の盛りに心を同じくして詩を賦すさまが詠われている。

45 参考資料20巻八、五冊目21枚目参照。

46 茶山の栗山堂の宴で詠んだ詩は、参考資料6三〇六頁参照。

【参考資料】

1 『菅茶山とその世界―黄葉夕陽文庫を中心に―』広島県立歴史博物館 一九九五年

2 『菅茶山のとその世界Ⅱ―黄葉夕陽文庫の概要―』広島県立歴史博物館 一九九八年

3 『黄葉夕陽村舎に憩う―菅茶山とその世界Ⅲ―』広島県立歴史博物館 二〇〇五年

- 4 『菅茶山と化政文化を彩る七人の巨人たち―菅茶山とその世界Ⅳ―』広島県立歴史博物館 二〇一二年
- 5 富士川英郎『菅茶山(上)(下)』福武書店 一九九〇年
- 6 菅茶山『黄葉夕陽村舎詩(全)復刻』児島書店 一九八一年
- 7 菅茶山関係書籍発刊委員会『菅茶山の世界 黄葉夕陽文庫から』文芸社 二〇〇九年
- 8 富士川英郎『江戸後期の詩人たち』平凡社 二〇一二年
- 9 今関天彭著・揖斐高編『江戸詩人評伝集1 詩誌『雅友』抄』平凡社 二〇一五年
- 10 極致庵主人篇『凡品雜録 第一輯』日本医事通信社 一九一九年
- 11 『日本学士院ニューズレター』第一巻第一号 日本学士院 二〇〇八年
- 12 藤原幹大・中村真菜美「谷文晁筆「対岳楼宴集当日真景図」(広島県立歴史博物館蔵)の史的位置―雅集図・送別図の伝統に照らして―」『日本近世美術研究』第六号 一般財団法人 北島古美術研究所 二〇二三年
- 13 阿河準三『雙玉樓帖』遺聞―柴野栗山をめぐる人々―『藝林』第四十号第三号 藝林会 一九九一年
- 14 萩田元廣「柴栗山先生雙玉樓帖書尾記文」財団法人共済会郷土博物館蔵
- 15 『広島県立歴史博物館所蔵資料展―菅茶山ゆかりの書画と茶・花・香関係資料―』財団法人頼山陽記念文化財団 二〇〇一年
- 16 杉本欣久「鈴木芙蓉「富士那智図」と渡辺崋山「千山万水図」―観念と真景のあいだ―」『日本近世美術研究』第二号 北島古美術研究所 二〇一九年
- 17 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩』第七卷 汲古書院 一九八七年
- 18 富士川英郎・松下忠・佐野正巳編『詩集日本漢詩』第十卷 汲古書院 一九八六年
- 19 川副町誌編纂委員会編『川副町誌』佐賀市 一九七九年 佐賀市公式ホームページ
- 20 『龍諸先生遺稿』写本(管理番号AB335001) 米沢市立米沢図書館デジタルライブラリー (文化十一年序)
- 21 磯崎康彦「享和、文化年間の谷文晁」『人間発達文化学類論集』第二十六号 福島大学人間発達文化学類 二〇一七年
- 22 森鷗外『鷗外歴史文学集』第六卷 伊沢蘭軒(一)・第七卷 伊沢蘭軒(二) 岩波書店 二〇〇〇年
- 23 『久保桑閑とその時代』高松市歴史資料館 二〇一二年
- 24 西岡 幹夫『讃岐の医学と蘭学』美巧社 二〇一九年
- 25 『重要文化財「菅茶山関係資料」指定品目録』広島県立歴史博物館 二〇二〇年

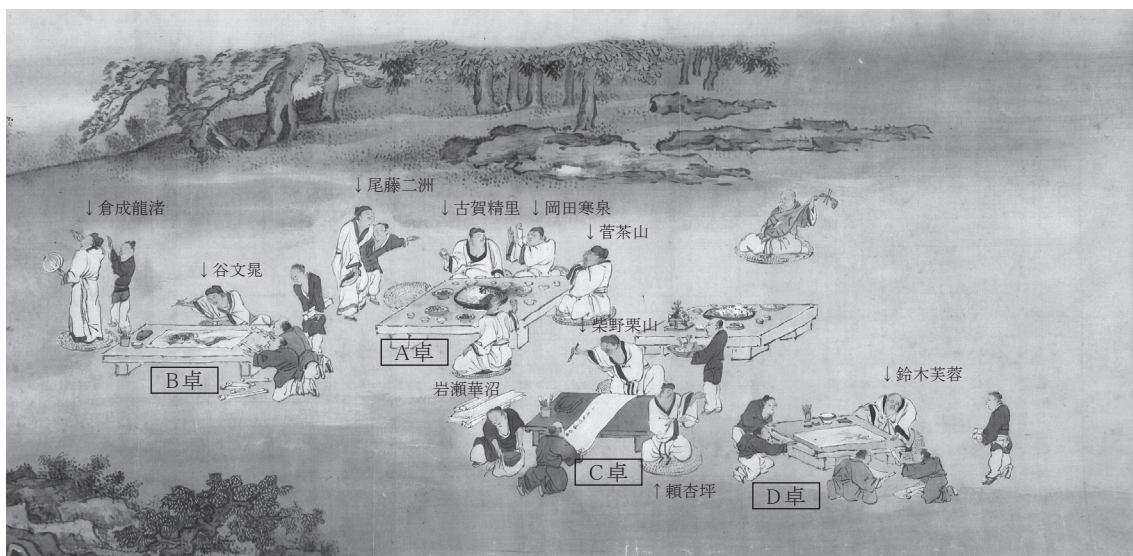


写真1 谷文晁筆「対嶽楼宴集当日真景図」(部分)(重要文化財 菅茶山関係資料 当館蔵)

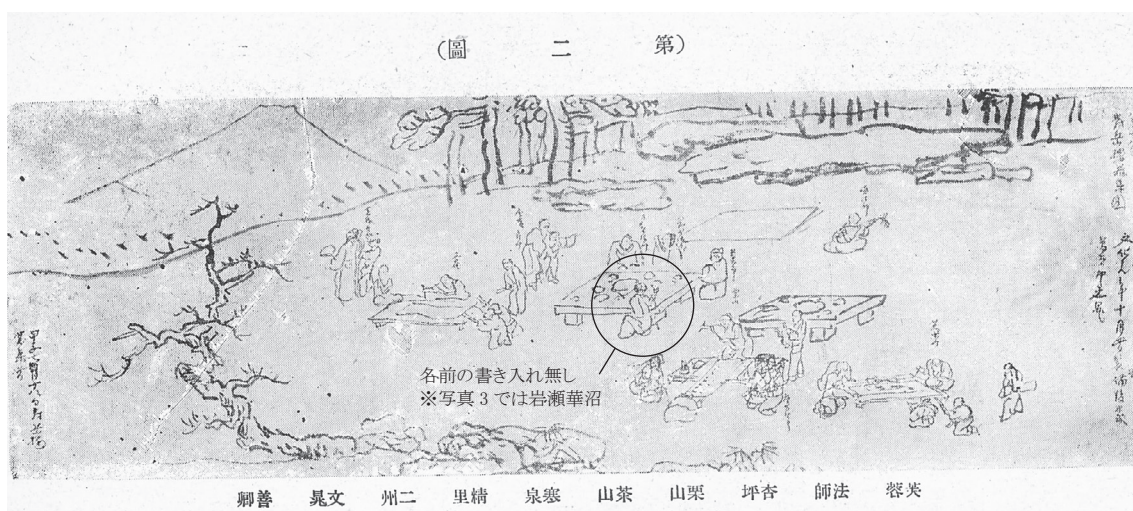


写真2 『凡品雑録 第一輯』第2図 出典：国会国立図書館デジタルコレクション



写真3 「谷文晁筆「昌平坂学問所図」」(部分)(日本学士院蔵)※筆者が画像をトリミング加工



写真 4 鈴木芙蓉筆 柴野栗山賛「蘇遊図」

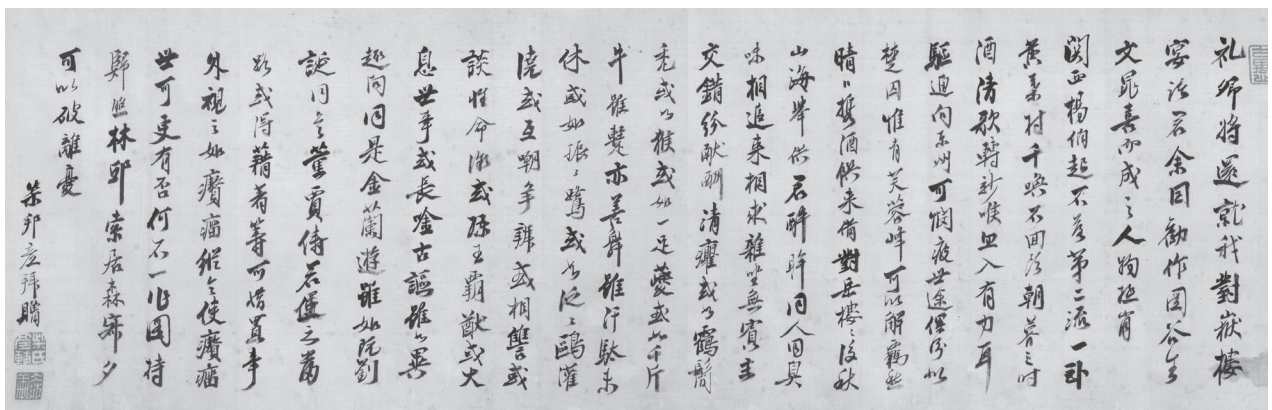


写真 5 柴野栗山 五言古詩

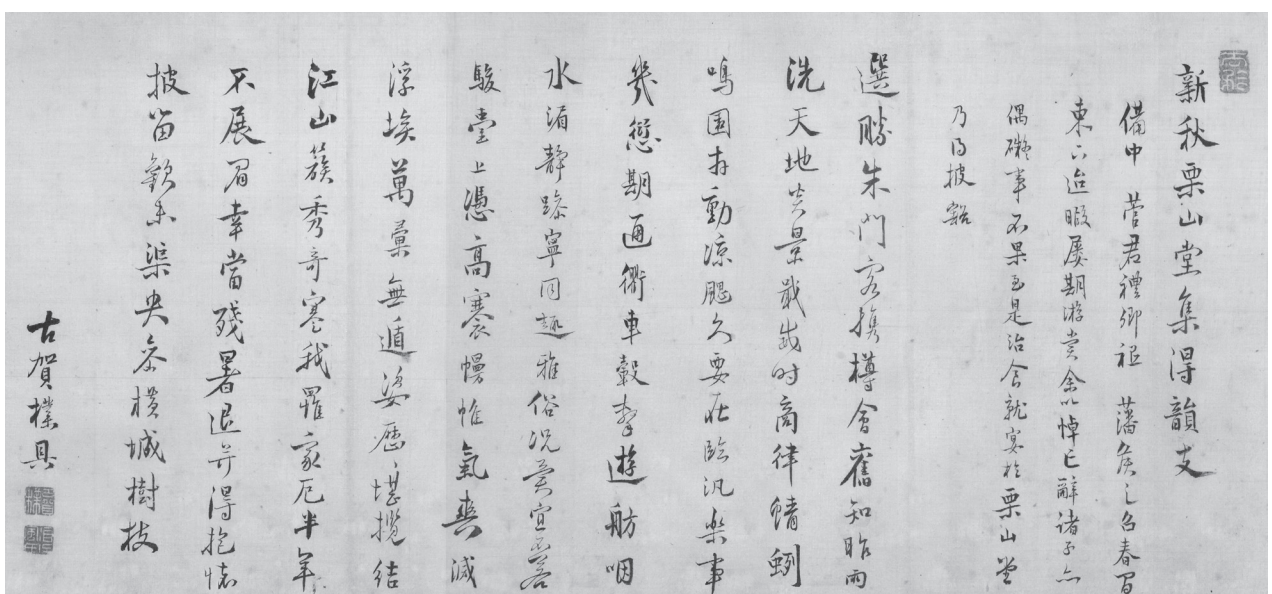


写真 6 古賀精里 五言古詩「新秋栗山堂集得韻支」

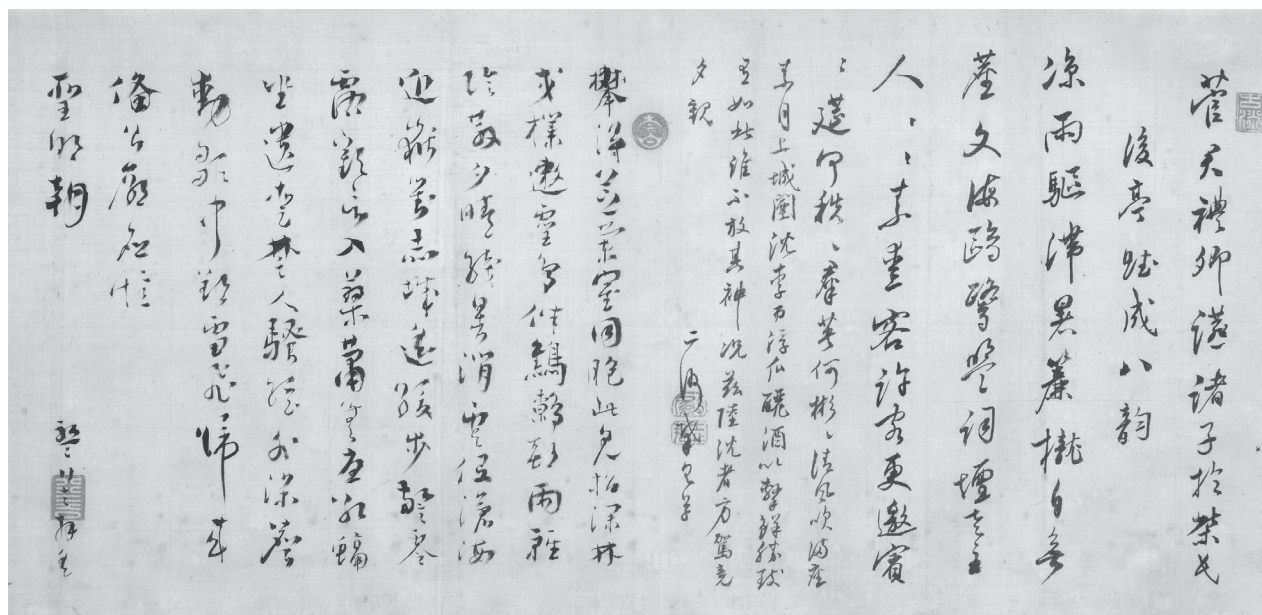


写真7左 岩瀬華沼 五言古詩 写真7右 尾藤二洲 五言古詩「菅君礼卿識諸子於柴氏後亭賦成八韻」

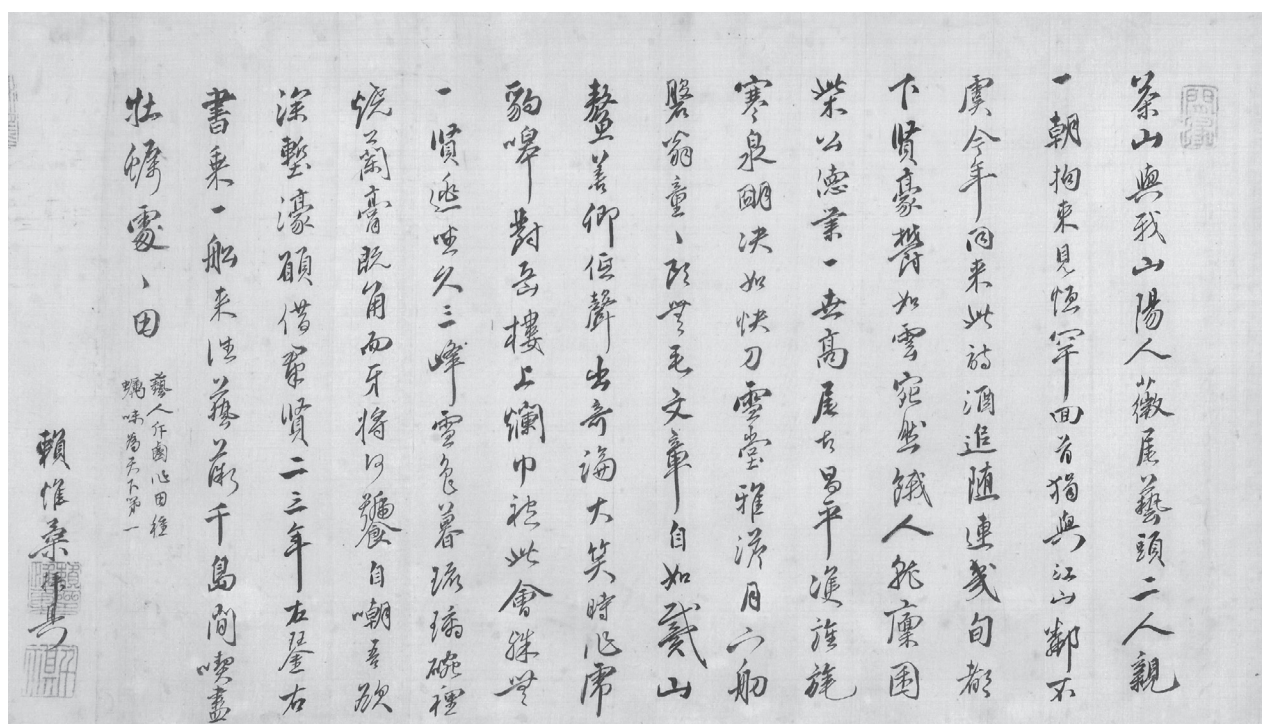


写真8 賴杏坪 七言古詩

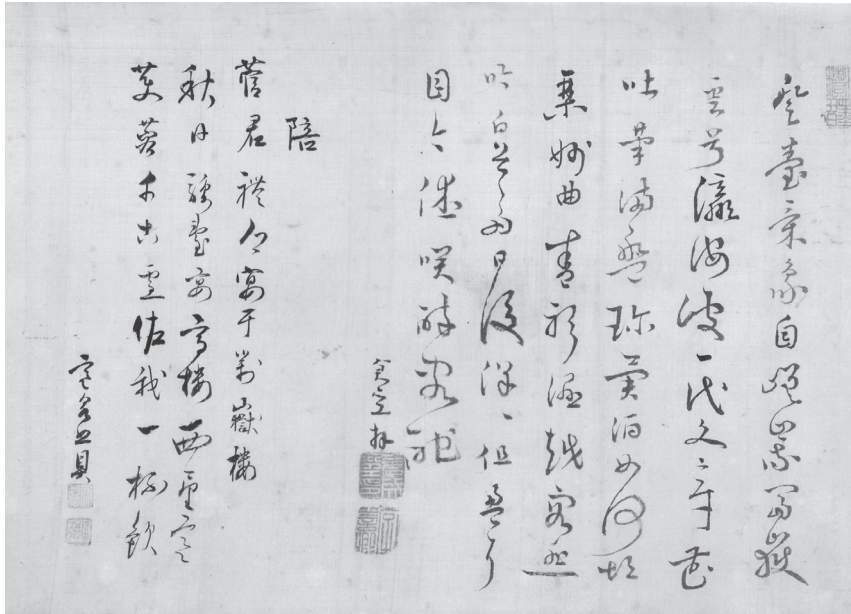


写真9左 岡田寒泉 五言絶句「陪菅君礼卿宴于对嶽楼」 写真9右 倉成龍渚 七言律詩

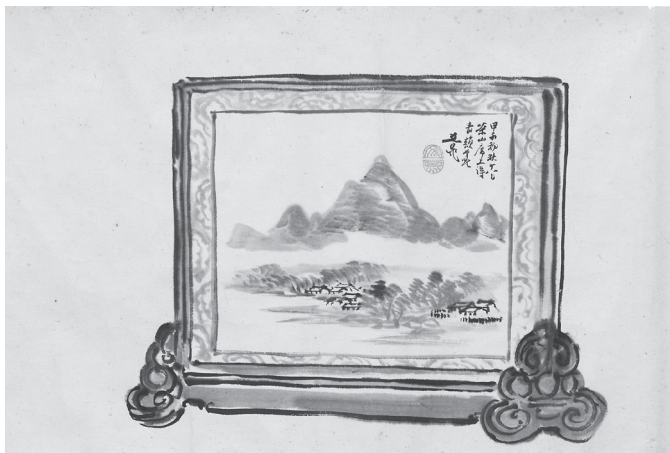


写真10 谷文晁筆「甲子初秋十八日 茶山席上得青韻如此」

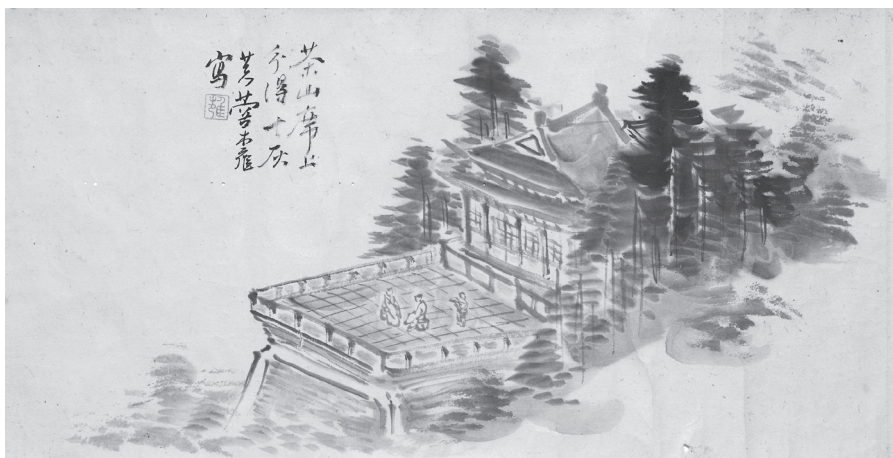


写真11 鈴木芙蓉筆「茶山席上分得十灰」

執 筆 者

吾田 朱里	広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所文化施設事務従事員
川邊あさひ	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館学芸員
久下 実	徳島文理大学文学部教授
白井比佐雄	広島県立歴史博物館アドバイザー
花本 哲志	広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
下津間康夫	元広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所学芸員

広島県立歴史博物館 研究紀要 第26号
BULLETIN of the Hiroshima Prefectural Museum of History Vol.26

発 行 日 令和6年12月27日
編集・発行 広島県立歴史博物館
Hiroshima Prefectural Museum of History
〒720-0067 広島県福山市西町2-4-1
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima
720-0067, Japan
Tel. 084-931-2513 Fax. 084-931-2514

印 刷 株式会社中野コロタイプ